



風 狂

第65号

風 狂 の 会



【詩】

失樂園（パラダイス・ロスト）

原 詩夏至

ローザの夢

出雲 筑三

ジャクリーヌの肖像

長尾 雅樹

顔立ち

高村 昌憲

消せないメールアドレス

なべくら ますみ

神隠し

さとう のりお

秋深く

高 裕香

【風狂ギャラリー】

三浦逸雄の世界（四十九）

三浦 逸雄

【エッセイ】

柳田国男のその詩の別れ

神宮 清志

昭和は遠くなりにはけり？（8）

高島 りみこ

【覚 書】

第二六回 風狂川柳忘年会報告

高村 昌憲

【童 話】

パンケとペンケ（7）

宿谷 志郎

【翻 訳】

アラン『芸術論集』（四）

高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール（五十音順）

——人間なんて  
所詮  
喰いかけのエデンの林檎を片手に  
前を抑えて  
地上を  
ただおろおろ  
走り回っているだけの  
猿なのさ！

そう言って  
男は  
（もとい、雄猿は）  
<sup>スツール</sup>  
隣の止まり木の女を  
（もとい、雌猿を）  
盗み見る  
——物憂く（物欲しげに）。

君たち  
どうせなら  
全部喰っちまえよ  
腐るし  
もったいないし  
その林檎。

お互い裸であること  
なんかより  
それはもう  
遥かにひどいことが  
恐らく  
見えるけれど  
その後で。

ローザは運転手から命令された  
ホワイトが乗車した  
席をあけろ と

ローザは微かな声で言った  
どきません  
警察を呼ぶぞ 運転手は威喝した

意志を通したローザは逮捕  
乗合バスにいたカラーたちは  
ローザの背中に輝く羽根をみた

ホワイトに席を譲らないと罰する  
この法律は正義ではない  
少女に代弁させるなんて  
なんて俺たちは意気地なし

保釈金を福祉協会が払い  
小さなヒーローは釈放された  
絶望に身を委ねるのは終わろう  
カラーたちは震える拳を固くした

俺達は金を払って乗車している  
差別をなくす戦いを始めよう  
ぬかるんだ道を 抵抗することなく  
さあ みんなで歩いて行こう  
翌日から学校、買い物など朝早く家をでて  
夜中に帰宅するものもいた

黙々とバスボイコットして三年  
乗客の大多数がカラーだったので  
バス会社との交渉は妥結した

あの時 ドリームを持とうと

呼びかけた牧師さんはあなたですか  
キングと申します ローザさん

額縁に収められた  
恋人の姿が女の負けん気を秘めて  
挑発的に鋭角に取材されている  
夢の城に閉じ込められて  
何かを言いたげに横顔を見せて  
両手でハンドバックを押えて  
黒い服の女が  
胸元を開いて肌を覗かせている  
黒髪に緑の鉢巻きを垂らして  
つんと澄まして気を惹こうとしている  
取り込められたジャクリーヌが挑発する  
額縁の中で誘う色気は  
直感的な手法で表出されて  
あなたのことなんか皆知っているわよと  
ふと話し出しそうな仕種の  
そんな彼女をいとも簡単に肖像にして  
自家薬籠中の洒落た感覚を披露する  
それは求愛の究極の手段でもあった  
ピカソ七十六歳の熱情は実感する  
いきなり出現したジャクリーヌの  
勝気の素性を受け入れながら  
絵筆に乗せて興を走らせる  
画像に仕上げた告白の予感が  
鋭い感性を一直線に表現する  
若い女の自尊心の研ぎ澄まされた奔放が  
合わせ鏡の鏡像として  
強い意志が導き出そうとする矜持  
目は語っているのだ  
固い芯を肉体で包み込んで  
私はあなたの全てを知っているというように

表情豊かな顔は酔っ払いや嘘つきの様に  
魂胆が優先して自らを表現していません  
偽善者たちは魂胆を表すことが無い様に  
吝嗇家たちも表現が好きではありません

顔の表情は豊かであればある程嘘つきで  
本当の自己の表情を表す人は穏やかです  
何故なら真の心の鏡が写すのは同じ顔で  
何時までも表情を変えずにいるからです

絵画や彫刻の完成した顔は何時も普遍で  
変わる事の無い顔に美しさがあります  
ビデオや映画の動く顔には情動が一杯で  
観る者からも真実の心が消えて行きます

事実をその儘映し出すのは真実ではなく  
動画には真のリアリズムが成立しません  
真実とは人の命も動物と分けること無く  
この世の全てを同次元の中で逃しません

現実の姿を超えるものが真実に違いなく  
顔の中にも表情を超えるものがあります  
魂胆によって作った表情には真実が無く  
彫刻と同じ様に顔立ちが真実を刻みます

パソコンを開け 送信されてきたメールをチェックする  
入って来るはずもないとは思いながら気になるアドレス  
彼女が娘さんに伴われ遠くの老人用施設に入ってから二十年近く  
度々メールのやり取りがあつて  
そのうち遊びに行くからね などど  
果すこともないだろう思いつきの挨拶なんかもしていた  
時には写真での近況報告が入って  
私の記憶の奥に暖かく仕舞われた

暫くメールが来なくて  
ようやく新しい生活に慣れ友だちも出来たのだろうと  
適当に判断をしていた  
しばらくぶりに彼女へのメールを送ろうと  
パソコンを開けて見たら彼女からの送信があつた

それは娘さんからの通信だった  
「静かに 穏やかに逝きました・・・」 と  
私は泣くこともできず 画面を見つめた  
一緒に送信されていた彼女の動画  
笑顔で 手を振って 何か言っている  
数日前の誕生日パーティーでのこと と  
彼女は私より十歳ほど上だった  
そうか そうだったのか

あれから十年以上が過ぎ  
私もあの時の彼女に近い年令になった  
頻繁に行っていたメールのやり取り  
もうメールが入って来ることもない  
私が送ることもない  
そうは思いながらも アドレスを消せないでいる



子どもの頃

ゴム短がいた  
側頭部に五センチ位の傷跡があった  
夫婦喧嘩の時に母親の投げた包丁が  
あやまって刺さってしまい  
それ以来街をさ迷うようになったという  
かちやばきマサコがいた  
いつも同じ服を着て  
やっぱりあてもなく街をうろついていた  
やぶ睨みの眼をからかうと  
両手をカマキリのように振り上げて追いかけてきた

<sup>ハタ</sup>旗バカがいた  
日章旗付きの棒を肩にかけ  
ブツブツ一人言をつぶやきながら  
雨の日も風の日もゴム長靴をはいて  
ただただ街を徘徊する  
戦争に行って人を殺し過ぎて  
帰って来たらああなってしまった  
という噂を子供たちは信じ込んでいた

時はアジア最初の肉体の祭典の始まる頃  
その頃から三人が街に出没しなくなった  
電線に引っ掛かった風船のように  
それがなくなったとしても  
誰も気に留めやしない  
元々無かったことなのだ

どこかの詩人が言っていたっけ  
「時代は変わる　それも必ず悪い方にね」って

※ゴム短　ペラペラの薄いゴムでできた靴

※かちやばき　新潟北部と山形でよく使われる方言。引っ掻くという意味

十二月に入ると、  
調布方面へのバスからの景色が  
一年中で一番の賑わいになる。

こんな大きなイチョウの木がここに  
可愛いカエデの木が  
そこにも あそこにも

秋の夜の冷気を帯びて  
自ら、染めていくのか？  
あるいは、染められていくのか？

一夜 一夜に  
静かに 人知れず  
色とりどりに人生を深めていく。

朝日を浴びた木々の葉は  
最後の日光浴を楽しみ  
一葉 一葉 散りゆく。

存在をピーアールするかのよう  
大地にたくさんの実を落とし  
香りと音を楽しませる。

いっそう冷え切った夜空にも  
凜と立ち  
冬に、立ち向かう。



三浦 逸雄 「鉄塔の上に月」 8号（アクリル・紙）2019

一九八五年七月六日に法政大学国文学会において、「柳田国男のその<sup>うた</sup>詩の別れ」と題する講演が行われた。講師は益田勝実氏である。そのときのメモと配布資料が手元に残っている。いろいろ聴いた文学講演の中では記憶に残る名講演であった。出来得る限りその内容を忠実に再現して、伝えたい衝動に駆られる。

その講演者である益田勝実氏は東大出身の法政大学文学部教授で、講演当時六〇歳代の最も意気盛んな頃だった。在学中の一九六一年に「古事記」の講義を一年間受けているが、この講義内容は今でも思い出すことがある。未だ三〇歳代でありながら禿頭にして頑健、いかにもエネルギーにあふれた氏は、講義にも熱が入り全身全霊を傾けているといった趣だった。噂によれば、氏は戦中に中国大陆で部下を戦死させたことを重く受け止め、以後わが身に楽を禁じ、ひたすら学問に打ち込み、もって贖罪とする意志をもっていたという。よって結婚もしていなかった。元軍人だけあって、声の張り上げ方に迫力があつた。あるとき不屈きな学生を怒鳴り上げたときのすごさには、教室全体が凍り付いた。窓ガラスがびりびりと震えるほどの大音声、怒髪衝天そのものだった。

国文学会が終了した後、場所を変えて懇親会がもたれる、そうしたときの益田氏はどこまでも謙虚にして、紳士的に接してくれた。わたしは氏と話すのが楽しみの一つで、慶應義塾で池田弥三郎氏が定年退職したとき、益田氏が古代文学を担当されたことがあつた。当時わたしは慶應の事務職員だったので、いろいろと話が面白く発展した。小田切秀雄もこの会では親しく接することが出来た。いま思えば至福のときだった。講演の要旨は以下の通りである。

柳田国男の詩について、現在の人にはほとんど知られていない。しかし松岡国男の名前で発表された詩は、島崎藤村を生む原因となった重んずべきものである。のみならず当時の詩壇に真の「人の声」を発した初めの一人であつた。柳田と前後して詩を書いた人の中で、国木田独歩、田山花袋、太田玉茗、宮崎湖処子などの人びとがあつた。

なかでも松岡国男の詩はもっとも優れたものであつた。松岡国男が抒情詩を世に問うたのは二二歳のとき、そして新体詩集『抒情詩』を二三歳のときに出し、『山<sup>さんこうすいちょう</sup>高水長』を出したのは二四歳のときであつた。

しかし柳田は詩と決別する。柳田は詩人・文学者としての自己を否定したのである。だが実際には、新体詩と決別してからの柳田はますます文学へ深くかかわっていった。若き詩人が詩を捨てて小説に転じたのは、島崎藤村、国木田独歩、田山花袋等々その例は多い。ただ柳田の場合は少しちがう。後年全面的に詩人としての自己を否定しようとした。

柳田の晩年に全集が刊行されようとしたとき、柳田はいくつかの条件を出した。第一に詩は一切入れない。第二に農政学は入れない。第三に日記類はごく一部とする。第四に講演は大きく制限する。等々。そのためついに「全集」とすることを筑摩書房はあきらめ、『定本柳田国男集』とするにとどめた。その後定本未収の柳田の論文を掲載したものが幾度か出たが、新体詩の刊行は



なされなかった。

昭和三五年柳田八六歳のとき、「日本民俗学の大敗を悲しむ」という講演をした。「文化人類学」という外国から入ってきた新しい波に溺れつつある弟子たち。文化人類学と対決し、日本民俗学を解体しようとしたのである。柳田は日本民俗学に破産宣告をして間もなく死んでいった。

この時点で詩人としての自分を切り捨てようとしたことは注目されてよい。自分の詩を駄目なものとして抹殺し、民俗学をも自ら抹殺した。二度にわたって自己抹殺を試みた珍しい例と言える。進んでは崩し、進んでは崩した。こうした文学者が居たことを大切にしたい。

なぜ石田英一郎（代表的文化人類学者：筆者注）と戦わなかったのか？柳田は自分の民俗学を学問として認めていなかったからである。ところが周辺の人びとが「民俗学」にしてしまう。それが六〇歳のときで、以後二〇年成城の自宅を城として民俗学を研究し、進めた。

ここで柳田の志をどう認めるか。ヨーロッパの研究者は自分の国を問題にしないで、未開発民族を問題にする。柳田は日本の民族を問題にしている。ここが違うところだ。今やヨーロッパ流の文化人類学が主流になっている。わたし（益田）の言うことなどもはや顧みられることもない。

このように益田勝実氏自身の慨嘆をもってこの講演は終了している。ここで益田勝実氏の民族学の受け止め方がいかなるものであったか振り返っておくのも重要なことと考える。

柳田国男の民俗学に強い影響を受けた益田勝実氏の「古事記」の講義には、ユニークなものがあった。古事記成立以前の三世紀から七世紀に至る、日本各地に伝わる民間伝承が、この古事記の中に多く取り入れられており、それらを切り離して読み解くことが大切だとした。例えば「ヤマタノオロチ」の伝承を見ると、須佐之男命が出雲の国肥の河のほとりで、河上から箸が流れてきたのを見て、この河上には人が暮らしていると見た。ということはこの民間伝承は日本人が箸を使い始めてから後に作られた伝承であると説く。ちなみに『日本書紀』にはこの記述がない。河上を訪ねて行くと、アシナズチとテナズチがクシナダヒメを中にして泣いていた。これを足と手を使って丹精して作ったクスシキ稲田とし、この稲田を毎年破壊しに七つの山を越え七つの谷を越えてやってくる怪物とは、台風を意味すると説いた。せっかく実った稲田を毎年破壊しに襲い来る怪物、これを退治してくれる英雄への願望がこの伝承を創らしめたというのが、益田氏の解釈である。このような古事記の講義は面白いこと限りがなかったが、その後の学会においてまったくと言っていいほど相手にされていない。今考えてみるに、このユニークな古事記論は、検証に値すると思うがいかなるものであろうか。

さて柳田国男の詩とはいかなるものであったか。本人が抹殺したが故に、多くの人の目に触れることがなく、ときも過ぎ地平の彼方に没した感のある詩作品をここに取り戻しておきたい。

#### 母なき君

ははなき君をあはれとて

泣きつる我もつひに亦

母なき人となりけり、

あはれと君はおぼすべし、

今よりのちは露の身の  
かなしくつらくある毎に、  
かたるも聞くも君ならで  
誰かはあらん、広き世に、

○

そは何ゆゑの涙ぞと  
とひたまふこそうれしけれ  
その声きけばいやましに  
おつるを見ても知りたまへ  
今さらかくとつげずとも  
（「野辺のゆきき」『抒情詩』所収）

### 野の家

袖子が家のやねの草、  
そでこがやねの草の露、  
ゆふべは宿る星ひとつ、  
あはれその星なつかしや、

空のゆふべになる毎に  
きよき姿を思ひかね  
うれしき星をまた見むと  
野みちを来れば野の末に、

うき世のわざぞすべもなき、  
さしも恋しき野の家を  
雲のあなたに別れ来て  
みやこの市を我が行けば

漲るちりのひまとめて、  
むかしの星ぞ見ゆるなる。  
星よみやこは楽しきか、  
ゆふぐれきよきかの人も  
見えぬ都はたのしきか。  
（同上）

かのたそがれの国にこそ  
こひしき皆はいますなれ  
うしと此世を見るならば  
我をいざなへゆふづゝ

やつれはてたる孤児を  
あはれむ母が言の葉を  
しずけき空より通ひ来て  
われにつたへよ夕かぜ  
(「野辺の小草」『山高水長』所収)

### 野の家

あしびきの山のあらゝぎ  
ただ一もと摘みてもて来て  
我妹子がたもとに入れし  
あしびきのやまの<sup>あららぎ</sup> 蘭  
いまもなほさやかに匂ふ  
あなうれし我をばいまだ  
忘れたはじ  
(同上)

### 春の夜

をぎつねきつね 春の夜を  
せめてはなくな<sup>ふる</sup> 故さとの  
わら家の鳩が たまさかに  
むかしの我を思ひ出でゝ  
夢に見にこん おぼろ夜を  
(同上)

### ○

わが恋やむはいつならむ  
雨よりしげき涙もて  
君がたもとをぬらしつゝ、  
いはぬ四年の苦しさを  
唯ひと度にうちあけて  
あはれと君も泣かんととき、

わが恋やまむは何時ならむ、  
いのちをかけてわが<sup>にく</sup>悪む  
かたきよ、君をいざなひて  
あなたの国に行くを見て  
今はとひとりしづかにも  
をぐらき淵に入らむ時、

わが恋やむはいつならむ、  
泣きて入りにしわが墓に  
春はすみれの花咲かば  
みち行く君がおのづから  
摘みてかささむ其日こそ  
陰なる我はまた泣かめ

（同上）



一九八八年九月、昭和天皇吐血のニュースが日本中を駆け巡り、その後も昭和天皇の発熱や下血のニュースが続いた。皇居にはお見舞いの記帳をする人々が長い列をなした。

当時のことをインターネットで調べてみると、「ああ、そうだったっけ……」といろいろなことが思い出された。まず驚いたのは天皇の様態に変化があると逐一、テレビの緊急速報でテロップが入ったのである。「天皇陛下の御様態（午後〇時）体温〇〇度 脈拍〇〇 血圧〇〇 呼吸数〇〇 下血量〇〇ミリリットル」というように。敗戦後、人間宣言をされたにもかかわらず、天皇には人権が適用されることなく、日々のプライバシーを晒されていく。そして、そのことに国民はまったくもって無頓着なのである。次に驚かされたのはテレビ番組やコマーシャルの過剰な自主規制であった。年末に向かって規制はどんどん厳しくなっていた。お笑い番組はなりを潜め、「血を吐く思いで、がんばります」という発言も顰蹙を買った。ミュージシャンの井上陽水が出演したコマーシャルでも、「お元気ですかあ〜」と言ったセリフが「陛下の様態がすぐれない時に何事か！」ということで、その音声は消され口パクのままで放映を続けていた。もうよく憶えてはいないが、クリスマスもお正月も静まりかえっていたことと思う。日本人お得意の暗黙の監視と同調圧力がこの国を覆っていた。

年明けの一九八九年一月七日午前六時三十三分、昭和天皇崩御。戦争、敗戦、復興の昭和は六十四年でその幕を降ろした。翌日の一月八日、平成の幕開けである。小渕恵三官房長官が「平成」の文字を掲げていたのを憶えている方も多いだろう。平成は冷たい雨とともに始まった。

話は前後するが平成に入る前のバブル絶好調の時期、私の生活にも大きな変化が起きていた。大学の体育授業以来の「山歩き」の再開だ。絵筆以外持つ体力など必要ないと思っていた私だが、たまには気分転換にと奥多摩の御岳山にハイキングに行ったのがことの始まりだった。御岳山はケーブルカーで神社のあるところまで上がることができ、頂上までは少し歩くだけというお気軽ハイキングコースなのである。私は編み上げブーツに水筒たすき掛け、相棒のさとうは鉄板の入った安全靴と、まったく舐めきった恰好での出発だった。知らないということは恐ろしいことだ。御岳駅からケーブルカーに乗って頂上に着いたのが昼過ぎ、もと来た道を返せばよかったにもかかわらず、反対側の秋川方面に抜けることにしたのである。うららかな秋の一日だったが、山を下り、林道まで辿り着いた頃には既に薄暗くなっていた。そこからバス停までは一時間の道のりだ。ヘッドランプなど持っていない。歩いているうちに辺りは真っ暗になり、途中、一台の車が停まって「近くのバス停まで乗っていきませんか」と声をかけてくださったのだが、なぜか咄嗟に「大丈夫です、歩くのが趣味なので」と断ってしまった。相棒は車に乗せてもらう気満々だったらしく、今でもその話になると恨みがましい目で睨まれる。彼は履いていた安全靴が足に合っていなかったらしく、血豆が靴の中で炸裂、歩くのはもう限界だったようだ。それでも何とかバス停から秋川駅行きのバスに乗り、無事、高円寺に帰り着いたのだった。

しばらくするとその惨憺たる山行きも「楽しかった」に取って代わり、さらに「また行きたい、行こう」と変化していった。さすがに酷い目に遭って学習した私たちは、登山用品店に行つて

トレッキングシューズ、ヘッドランプ、ゴアテックスのカッパなど低山歩きに必要な品を買い揃えた。奥多摩の日帰り低山歩きから始まり、それにも飽き足らなくなってくると山小屋に一泊の山行きへと移っていった。東京都の最高峰・雲取山には一時、毎週のように通った。雲取山は東京都、埼玉県、山梨県の三県に跨がっているが、宿泊したのは埼玉県側の雲取山荘だった。個性的な山荘のあるじと酒を酌みかわすのが楽しかった。

だが人間とは実に飽きやすい動物なのだ。やがて山小屋泊まりにも飽き、テント泊がしたくなってきた。時はバブルまっ盛りである。躊躇することなくテントや寝袋、携帯ガスボンベなどを買い足した。食料や絶対に忘れてはならない酒をリュックサックに詰め込むとかなりの重量となったが、テント泊には山小屋では味わえない楽しみがあった。雲取山荘にはテント場がなかったので、東京側にある奥多摩小屋の管理しているテント場を使った。自然の中で料理をし、酒を呑む。夜は満天の星の下、吹き抜けていく風をテント越しに体感しつつ就寝ことができた。テント場は頂上から少し下った場所にあつて、険しい山道を登ってこなければ辿り着けなかったのも、いつも貸しきりのような状態だった。残念ながらその奥多摩小屋は二〇一九年三月三十一日、老朽化のため閉鎖され、テント泊もできなくなってしまった。

登る山も奥多摩から奥秩父、南アルプスと、より高い山へと移っていった。夏から秋にかけては日本第二の高さを誇る北岳を日帰り登山するという、これまた無茶な山行きを度々行っていた。高円寺駅から始発の高尾行きの中央線に乗り、高尾から甲府行きの中央本線に乗り換える。甲府からはバスで広河原に向かう。広河原から北岳はもう目の前で、夏の登山シーズンともなると、広河原から北岳へ向かう山道は人々で満ち溢れ、一本の線となって上へ上へと連なっているのだった。

十月の半ば、私たちはいつものように北岳日帰り山行きに出かけた。前週にも北岳に行き、紅葉の美しさに惹かれ、その年最後の北岳行きを決めたのだった。しかしその日の北岳は、もはや前週の北岳と同じ山ではなかった。ここで私たちは再び「山をなめちゃいけない」という教訓を味わうことになるのだった。（続く）

＜二〇一九年十二月一日（日） 吉祥寺・永谷ハウスにて＞

今年の忘年会は、前年と比べて些か趣が異なっていた。それと言うのも、主宰者の北岡善寿氏が去る八月十九日に逝去されたため、北岡氏を追悼する川柳を題詠に代えて二句まで、そして自由詠を三句まで、計五句までが投句条件となったからである。北岡氏が逝去されたため、題詠の題を定めずに主宰者の死を悼んでの開催となった。一九九四年（平成六年）十二月に第一回風狂川柳忘年会が行われてから、恐らく初めての試みであろう。

選考方法については、従前のおり参加者全員の投票によって決定されることとなった。全投句数は、①北岡氏への追悼句が十四句、②自由詠が三十八句、計五十二句のうちから優れていると思われる五句の番号を各人が投票用紙に記入して、票が多い順に①については一席、二席及び三席を、②については一席、二席、三席及び佳作を各々決定した。但し、従前から自分が創った句には投票しないことが暗黙の了解事項になっている。敢えて記名投票にしない処が、風狂の会一人ひとりの相互信頼であり矜持であろう。なお、同数の場合は参加者全員の挙手により決定したが、自由詠の佳作においては同点の句が多かったので、参加者全員が再度投票用紙に記入して決定した。以上の結果、今回の入選句は次のとおりである。

## ◎ 北岡善寿氏を悼んだ句

|    |                    |     |
|----|--------------------|-----|
| 一席 | 芋焼酎 呑めば聴きたい 善寿節    | 昌憲  |
| 二席 | 呑むほどに 口調と意味が ちょい不明 | ますみ |
| 三席 | 影法師 北岡さんとコップ酒      | たか子 |

（一席）北岡氏がアルコールを呑む時は、最初の乾杯はビールでも、その次は何時も必ず芋焼酎であった。筆者も何時しか同じになったが、話題は中々同じにならないのである。

（二席）話が佳境に入ると口調は冷静で穏やかでもアルコールの影響は語彙の曖昧さに現れて、そろそろお開きになる。そして歩きながらもよく喋る話し好きの人であった。

（三席）北岡氏とお酒は切っても切れない様で、入選句は全てお酒の句であった。コップ酒の様に容れ物は上品でなくても、お話は何時も上品な内容で影法師がいる様であった。

入選しなかった句にもなかなか優れたものがあつたので、次に筆者の独断と偏見でご紹介することにした。

|                     |     |
|---------------------|-----|
| ・桜は散れど 思い出散らず 善寿さん  | りみこ |
| ・オーイ みんな元気か オレは天国だ  | 武彦  |
| ・鳥取に ことばを論す 風のごと    | 筑三  |
| ・酒飲みに 友を求めて 黄泉の国    | 裕香  |
| ・はるかきた おかのかなたへ 冥路ゆく | 志郎  |
| ・もういないこと忘れそうな年忘れ    | 詩夏至 |

・時と空 はざまを纏（まと）い 人はいく ふさ

## ◎ 自由詠

一席 この時節 おとなしい奴ほど要注意 筑三  
二席 認知症なったふりして本音きく 筑三  
三席 顔を見て 桜見る会の 意味を知る ますみ  
佳作 あゝこの頃は譲られた席の心地よさ ふさ

（一席）年末になると悪いことを考える人が増える様であるが、悪事を考えたり嘘をつく人は無口になって酔狂にならないものだ。従って酔っ払いに悪人はいないに違いない。

（二席）一席に続き二席も筑三さんです。二句も入選した筑三さんは認知症でないに違いない。認知症の振りして七句も投句すると、次回は失格ですよ。これは本音です。

（三席）功績があった人が招かれる会ですが、詐欺を働く会社の会長が招かれるなら、忖度して最良、特別待遇、改竄、隠蔽で国民を騙すことの功績でも招かれる会なのでしょうね。

（佳作）電車の席を譲られて肩身の狭い思いをする人は元気な証拠かも？ でも人の親切を素直に受入れて譲った相手と思う度量は、高齢者ばかりでなく若い人にも必要です。

自由詠にもこの外に優れた句が色々とあったので、同様に筆者の独断と偏見で次にご紹介することとする。

・絶望という名の鬼が「鬼は外！」 詩夏至  
・ぐれた娘がトランプにらみ カード切る 志郎  
・ベネチアに防波堤を築かねば 武彦  
・韓国に抜かれた事さえ分らない のりお  
・お金では真の楽しみ買えません 昌憲  
・いつからか数をかぞえつつ了す家事 ふさ  
・につぼんの心臓とめる気？ 晋三くん りみこ  
・もう一年 もう一年の 紅葉狩 たか子  
・雨降ってホコリの匂い身にしみる 清志  
・強がりでも国際平和になりますか 裕香

## ◎北岡善寿氏についての思い出

北岡氏は強制的な黙祷などは余り好きでなかったもので割愛して、会の最後に北岡氏を偲んで参加者全員が思い出話を各々語った。5・7・5に字数制限された川柳の作品だけからでは十分に理解出来ない点多かったが、一人ひとりの思い出を聞くと、北岡氏の人となり改めて浮き彫りにされて来て、大変に懐かしい思いが溢れた。その中で最も印象的な人となりは、誰にでも気さくに話をして決して威張ったりする姿勢が無く、上下関係を好まない公平な態度の人であったことで、全ての人に共通した思い出であった。これは地位や名誉に拘らない北岡氏が詩人として表現する姿勢の延長でもある。たまたま隣に座った人に「私は話が好きでねえ！」と北岡氏が言

っていたとのことであるが、まさに誰とでも話が出来ることがその証左でもある。上下関係を気にする人は、真の表現にも疎いに違いない。

従って今後も風狂の会は、強制や強要の無い自由で自主的に表現する人の集まりであることを願っている。そのためにもお互いの表現を確認するために、今後も月に一度の集まりを持ちたいと思う。自らの表現の向上に努めて頂く一助になることを願っている。最期まで詩人として＜表現の人＞であった北岡氏の姿勢を規範とすることを誓って、この報告の筆を擱くこととする。（完）





## パンケとペンケ（十三）

少しずつ成長するパンケちゃんとペンケちゃん。13歳になった。

パンケちゃんは「夏になったらキャンプに行こう」とペンケちゃんをさそった。

行こ行こ・・・ノリのいいペンケちゃん。

「どこ行くの」と言うと「トクシウン（アメマスの住む）ペツ（川）ヌプリ（山）のふもとにキャンプ場があるんだ」・・・（徳舜瞥山か・僕）

「行こ行こ」もうワクワク。

広い裾野のキャンプ場の木かげに、ペンケちゃんがシラカバの木にオオバギボウシの葉っぱの両はじをヒモでつなぎハンモックを作ってくれた。

ふたりはハンモックに寝ころがって空と山を見る。

「わ～、広い。お山もステキ」

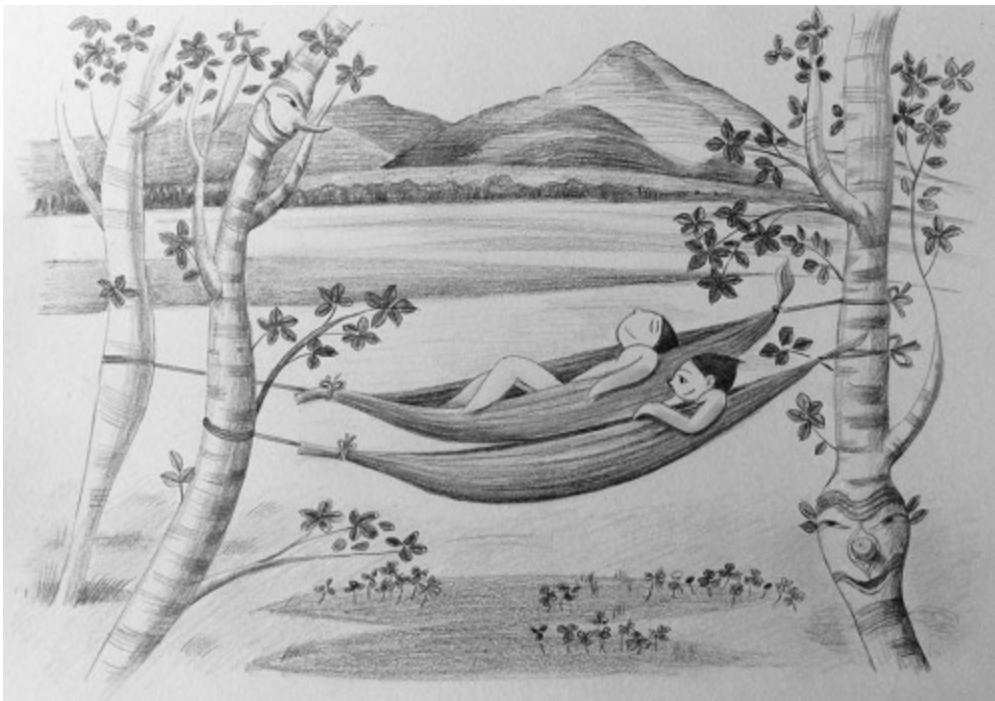
「今夜はきっと星もきれいだよ」

「パンケ兄ちゃん、ありがとう」

「来れて良かったねえ」パンケちゃんも嬉しそう。

あと2年もすれば、この子たちも成人だ（15歳）。

いつまでも仲良くいて欲しいな・・・なんて考えていたところで眠りこんでしまった。



#### パンケとペンケ（十四）

パンケちゃん、ペンケちゃん、ちょっとお昼寝とか思っていたら雨がパラパラ落ちて来た。

「パンケ兄ちゃん、雨みたい」

「平気だよ。ちょっと降るだけ。夏にはよくあるんだ。この雲がどけばピーカンだよ」

でも、というわけで土手の上の大きなフキの林で雨やどり。

大きい、大きい、大人のこうもり傘ほどもあるフキがいっぱい生えている。ふたりでその下にもぐりこんだ。

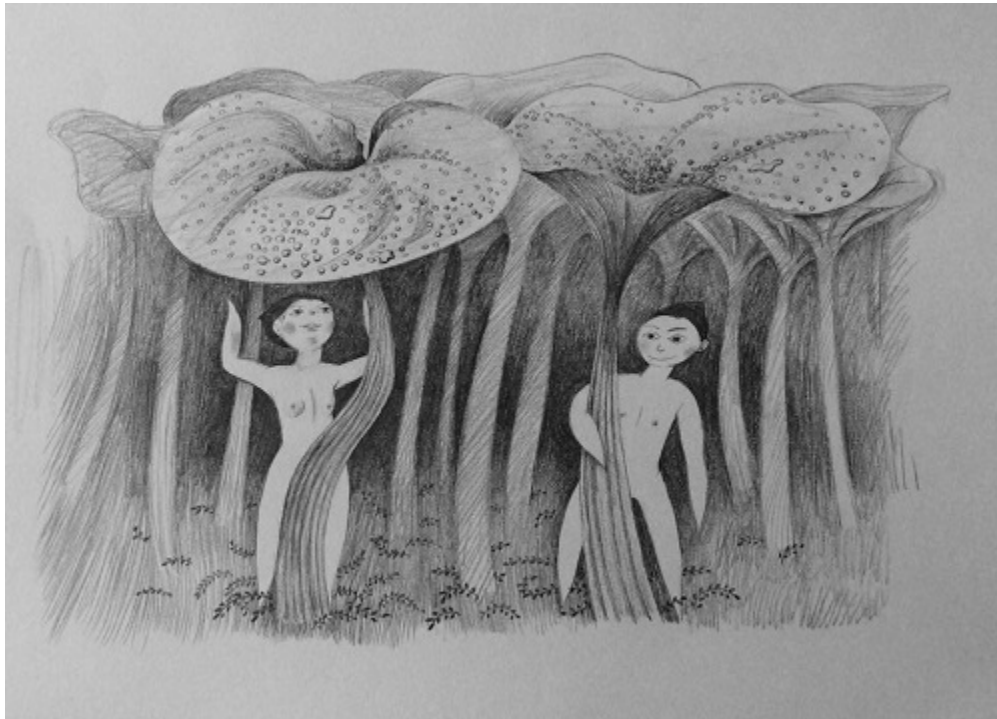
パンケちゃんの言ったとおり雨はすぐにやんだ。

「ねえ見て、大きな葉っぱに水玉がいっぱい光ってる。きれい」

「ほんとだ。葉っぱの真ん中に集まってくる」

「狩りをするおじさんが。山でフキの水を飲むって言ってたのはこのことね」

まだまだ明るいので、ふたりはかくれんぼしたり鬼ごっこしたり。パンケちゃんもキャツキャツさわいでいる。



### 第三章 イマージュと対象について

私たちが事物の写しを記憶として残したり、言わば頁の様に捲ることが出来るという考えは単純で便利ですが、余りに少し子供じみています。この理屈を通すと芸術作品は翻訳と同じで、内面的な推敲によって結び付いたイマージュそのものとしては屢々脆くもあります。その反対に芸術作品は本当の現実によって夢を終わりにして消去しているのは既に明白ですし、更にそれが芸術家のためでもあります。しかしながらこの概念をもっと確かなものにして、何時も多くの時間をかける夢のこの探究から芸術家を解放するには、学説に喜びを見出す信じられない位に多くの人々を訓練させるために、学説に少しは関わることも必要です。

対象は与えられません。それは提起され思考されます。真実の太陽が、何よりも思っている以上に極めて遠くて大きいのは明らかですので、私たちは数々の経験の中で経験を認めるために太陽の後を走ったりします。天文学全体がここでは対象を支えています。しかし落日の時に円盤として感受された太陽は、やはり推測され思考されます。あるいはもっと感じの良い対象を考えるのに月は空中で千歩の処に知覚されます。しかしこの距離で済んでいるのも、私たちが木々や鐘楼の後や雲の後でさえも月の通るのを見るに過ぎないからです。要するにどんな距離も、従ってどんな位置も経験に従って推測されますし、間違いも常にあります。つまり判断力は印象に結び付いていてそれに形を与えていると言えますが、その指摘は新しいものではありません。対象をその場所で拒絶する如何なる判断も無い対象とは何であるのかに関しては、月が私の目の上や目の中にある様に、本来は表現しようのないものです。

しかしここには、極めて自然で探究するに余りに稀有な一つの考察があります。思い出とか夢の中の様にイマージュとは、対象のイマージュです。そこには形や距離や知覚も認められます。森は夢の中でも私から遠い処にあり得ますし、列柱はそれらの大きさが規則正しく小さくなることで夢の中でも同じく奥行きがあります。そして夢の中の鐘も、鐘楼の高い処からそれらの鐘の音が私に聞こえて来ますし、私が夢の中で嗅ぐ薔薇の花は、私の指の間にあったり、薔薇の樹木にあったりします。イマージュも又、それ故に決して与えられずに、常に印象に従って推測され思考されたものであり、少なくとも継続されて調査されることはありません。それ故に想像することとは知覚することですが、不用心です。従って私は空中の千歩の処にある月を想像しますが、月が沈む時はもっと大変に遠いのです。想像することとはそれ故に、なお判断することであり思考することでもあります。これらの見方によって想像力と知覚は、実際に混合しているので、一つになる傾向があります。というのも、私が対象の距離と大きさと性質を間違えないで知覚する様な風景は決してないからです。ガラス窓に映る太陽は炎と思わせるでしょうし、以下同様です。それ故に想像力は偽りの知覚になるでしょう。

もしも私が今から偽りの知覚における誤りが何処から来るのかを探究するなら、第一に、苦労しないで発見するのは身体と諸感覚とに関する状態です。それは対象が別ものであることを私に思わせてくれるものであり、まるで暗闇から抜け出て、現実には弱くて遠い光も非常に強力に私

に全く近い光であると私が思って仕舞う様なものです。第二に、何らかの情動とか情熱とに基づいて生まれた思い込みです。例えば恐怖心が、ドアの閉まる音を大砲の一撃であると思わせる様なことです。そして、これらの情動や情熱は、私を興奮させる限り身体の動揺、発熱、悪寒、震え、行動の開始と抑制から成っていますし、想像力の勢いが事物の動きを変える身体のメカニズムによってやはり一度に決定し、それと同時に十分な検証もしないで現存したり活動したりするものを、私たちに信じる様に勧めるのは明らかです。それ故に知覚能力は、私たちの身体の状況と状態に起因するものを可能な限り除外する調査によって、対象の真実を探求するものであると言いましょう。その代わりに想像力は、主として情動と情熱が混合した最初の証言を信用することから成ります。つまりデカルトが言った様に人間の肉体による感情の秩序に従って、対象の現状と状況と性質を判断することから成っています。その様にしてイマージュでしかないイマージュは、偽りのイマージュであり、人間の肉体に舞い戻ります。実際に震えて武装された身体にとって、唯一の存在でないとしてもそれに大変に近い想像力による恐怖には、何が残っていると言うのでしょうか。（完）

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

さとうのりお

一九五〇年、新潟県生まれ。高校卒業後、絵の道に進みたく、反骨、反権力、ユニセックスの雄・長沢節主宰の「セツ・モードセミナー」に通う。四年で卒業後、五年間位エセヒッピー的なぐうたらではあるが、充実した生活を送り、色々あった後、印刷会「待望社」に入社。仕事を通じて、日本詩人クラブ理事長も務めた笈楨二氏と知り合い、彼が発行する動物に関する小冊子に短いエッセイを書くようになる。笈氏亡き後の二〇〇九年より、詩誌「山脈」のメンバーとなり、詩を書くようになる。尊敬する詩人は、笈楨二、ジョン・レノン、村上昭夫。日本詩人クラブ会員。

宿谷志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターなどをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。二〇一七年より北海道に半年の移住を繰り返し専念。趣味はフルート。よく聴く音楽はバッハ、モーツアルトの作品。

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンス・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都中野区在住。

日本詩人クラブ、日本現代詩人会会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年 待望社 第32回福田正夫賞）

装幀家（高島鯉水子）

究極の趣味はキックボクシング（アマチュア）！最近は試合に出ていないが...

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロボ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 9 7 1・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忌詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパプーの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロボリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。



一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラス  
ケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。  
一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。（以上）

同人誌 風 狂（ふうきょう） 第65号

2019年12月19日 登録

<http://p.booklog.jp/book/128997>

編 集：風狂の会（担 当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/128997>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社